

大山ふるさと伝承

～太古の昔から信仰を集めた“伯耆の山”～

1. 金蓮上人 ものがたり

<大山寺を開いた金蓮上人>

- ・ 金蓮上人とは、養老年間（西暦 717～723）に大山に入り地蔵菩薩を祀って大山を開いた伝説上の人物である。
- ・ この伝説は、「大山寺縁起」という大山寺に伝わる伝承集に描かれている。この大山寺縁起は、大山寺の起源や信仰のすばらしさを伝えるために作られたものである。著者は不明であるが、この縁起をもとにして書かれた大山寺縁起絵巻が応永 5 年（1398 年）に完成していることから、それ以前にできたものと思われる。
- ・ この縁起は、情報通信手段がなかった昔、お寺の信仰を伝えるために作られたフィクションである。その信仰のすばらしさを強調するために、いろいろな物語を作り分けやすくお寺の起源や御利益などを人々に伝えた。今風にいえば、お寺のCMや広報誌のようなものである。ほとんどの内容がいわゆる伝説であり、作り話であるといわれているが、その中に昔の人が伝えたかった真実が秘められているように思う。
- ・ 大山寺縁起の第七段に金蓮上人が大山寺を開いたときの話が描かれている。このくだりは、いろいろな物語として伝わっているが、ここでは原文とその現代語訳を紹介することとする。

<原文>

- ✓ 出雲の国玉作と云ふ所に獵師あり。名をば依道と云ふ。美保の浦過ぎけるに海の底より金色の狼出で来る。
- ✓ あやしみ追ふ程に此の山の洞に入りけり。山の形水の流れ故有る所にこそとあやしく思ひけれども、かかる毛色したるけだ物世に有りがたく思ひて、只一矢に射ころさんとしけるに、地蔵菩薩矢前に現じて見え給へば信心忽ちに発りて、弓をはづし矢を捨て殺生の思ひをたちけり。
- ✓ 彼の狼いつしか形を変じて老尼と成りて語り申しけるは、我は是れ登攬尼なり。汝を導き此の山に入らんが為に化して獸となりき。我れ己に三生の行人として、此の山を守る山神となれり。汝又宿縁我に有り。願はくは、此の洞に行きて諸共に地蔵権現の利益にあづかり給へと、さまざまかたらひ申しければ、道心速かに発りて髪をそり衣を染めて、同心に行ひすまじつ、金蓮聖人とて練行年つもりにけり。

<現代語訳>

☐ 伝承者 千藤広氏：現代語訳指導

- ✓ 出雲の国玉造というところに獵師がいた。名を依道といった。美保の浦（美保関）を通り過ぎたときに海の底から金色の狼が出てきた。
- ✓ 不思議に思い後を追っていくとこの山（大山）の洞穴に入った。すばらしい山の姿、清らかな水の流れる場所であり何か由緒のある所で不思議だと思ったが、このような毛の色をした獣はこの世に滅多にないと思って、一本の矢で射殺そうとしたところ、地蔵菩薩が矢の前に立ちはだかりなされた、するとたちまち信心の心が起きて、

つがえていた矢を捨てて殺生の思いがなくなってしまった。

- ✓ この狼はすぐに姿をかえて老いた尼となって言われることには、「私はとらに登攬尼というものです、あなたを導いてこの山に連れてこようと思ひ獣に姿をかえていた。私は三生（前世、現世、来世（後生））の修行者として、この山を守る山の神となった。あなたは前世からの因縁で私とこのように巡り会うこととなっていた。願わくは、あなたは私と一緒にこの洞穴で地蔵権現のご利益にあずかりなさい」と言われた。そして、その他にもいろいろなことを教えていただいたので、すぐに仏道の心が湧いてきて髪を剃り、衣を黒く染めて、登攬尼と同じ気持ちでひたすら修行をしながら、金蓮上人となって修練や修行を何年も何年も行った。

<なぜ、玉造の獵師が美保の浦から>

- ・ 日本で最も有名な伝説は、日本書紀、古事記である。日本の起源を伝説の中に描き、後世に伝えるものである。これらの伝説の中に作者の伝えたかった本当のメッセージが隠されているのではないかと多くの人々がその秘密を研究している。
- ・ また、この地方に伝わる「国引きの伝説」の中でも、新羅の国や越の国から土地を引っ張るなど昔の交流のあった場所を伝説に描き、史実を後世に伝えている。

- ・ この大山寺縁起を見ていくとある一つの疑問が浮かんでくる。
- ・ なぜ、玉造の獵師が美保関まで行って、それも海の中からでてくる狼を追いかけなければならなかったのか。米子の獵師が会見町に行って林の中からでてきた狼を追いかけても良かったのではないか。
- ・ この疑問を数人にぶつけてみると。

☑ 伝承者 杉本良巳氏：

- ✓ 玉造の漁師でなければいけなかった理由について。お寺も信仰があって初めて成り立つ。信仰が厚く多くの寄進をしてくれる人たちを大切にしたいはずである。
- ✓ その昔、玉造はその名が表すように「まが玉」を作るところであり、多くの富を持っていた地域であったと思われる。
- ✓ 大山へ納める宝物も作っており、多くの寄進もあったのではないかと語る。

- ・ 大山寺縁起の中には有名な生きたお地蔵さんの話がある。
- ・ 備後の国「神石（かめし）」に信仰の厚い人がいて、生きた地蔵を見たくて下野の国「岩舟」（現在の栃木県）まで行った話である。

☑ 伝承者 杉本良巳氏：

- ✓ 備後の国「神石」、現在の神石町（じんせきちょう）は広島牛の大産地であり、たたら製鉄の集積地である。そして大山への信仰がもっとも厚い地域であった。
- ✓ たたら製鉄で土を取った後の開けた平地で放牧して牛を育てた。豊かであったその地方の人々は、大山講をして毎年村の代表が大山参りをしたという。
- ✓ いわば大山にとってはお得意さまであった。現在でも神石町に行くと公民館に「大山参り」「大智明権現」などと書かれた幟が立っており、今なお大山への信仰が続いていることを物語っている。

- ・ それでは、なぜ美保関のそれも海から狼が現れなければならなかったのか。
- ・ 美保関は、出雲神話の中でも重要な役割を果たしている。
- ☑ 伝承者 武光誠氏：「古代出雲王国の謎」
 - ✓ 国引き伝説では、八束水臣津野命が越の沖から取ってきたと伝わっている。
 - ✓ 国譲り伝説では、「高天原から降りてきた武甕槌神らは、出雲の稲佐の浜に降り立ち大国主命と交渉し、ついで美保崎に移って大国主命の子の事代主命に国譲りに同意させて身を隠させる（死の世界に行かせること）」とある。
- ☑ 伝承者 相見行佳氏：
 - ✓ 島根半島には、大陸文化の痕跡が強く残っているところである。朝鮮半島から沿海州にかけての人々が多くの文化を持ち込んだのではないかと語る。
- ☑ 伝承者 杉本良巳氏：
 - ✓ 海から狼が現れたことは、神様が海から渡ってきたことを表しているのではないかと語る。
- ・ 今まで述べてきた、出雲の神々と海との関係やそこに残された痕跡から考えると、海の向こうから何かが伝わってきたことを感じさせる。

< 地蔵信仰 >

- ・ 大山信仰の中心は、地蔵信仰である。
- ・ 大山の守り神であった登壇尼の前に立ちほだかったのが地蔵菩薩である。そして、大山の洞穴に祀られたの地蔵権現は、地蔵菩薩が姿をかえて神様として現れてきたものである。この地蔵権現こそが大山のご本尊である大智明大権現である。
- ・ 大山の最も大切なところは、賽の河原とそれを見下ろすところにある大智明大権現社（今の大神山神社奥の院）である。
- ・ 賽の河原は、死者の霊が集まるあの世とこの世の境にあり、金門は（昔は、「禁門」と書いたようである）あの世の入口といわれている。死んだ人の霊は高い山に集まるといいう信仰から来ているといわれている。
- ・ そして、大智明大権現社には、地蔵菩薩が祀られており、大山信仰の中心である。
- ☑ 伝承者 杉本良巳氏：
 - ✓ 高野山の地蔵院や京都の壬生寺などお地蔵さんを信仰するお寺はたくさんある。
 - ✓ しかし、大山のように寺院集団が信仰の中心としてお地蔵さんを大切にしているところは珍しいと語る。
- ・ 仏教は今から約 2500 年前にインドで生まれたとされている。釈迦は、当時インドで信仰されていた、バラモン教の神々を引用して自分の教えを説いたという。地蔵菩薩もバラモン教の神が原型といわれている。

- ・ インドで生まれたお地蔵さんは、ガンダーラ、パーミヤンをへてシルクロードへ、その後タクラマカン砂漠を通り敦煌、洛陽、北京へと伝わっていった。三蔵法師がどのような気持ちでお経を中国へ持ち帰ったのだろう。
- ・ そして、日本には六世紀半ば、百済から伝わったといわれている。遠いインドで生まれたお地蔵さんが長い道のりをかけて、たどり着いた場所がこの大山寺ということになる。そう考えるとシルクロードの延長線上に大山寺が見えてくる。

= 聖域大山 =

- ・ 大山は、その山自体が信仰の対象であり、聖域とされてきた。弥山禅定の行事にも見られるように、明治時代まで選ばれた数人の行者だけしか山頂に登ることを許されていなかった。また、山内は女人禁制であり、女性の入山は禁じられていたようである。
- ・ 大山には、登ってくる人たちを浄めるいろいろな仕組みがつくられていた。大山寺参道から大神山神社へ続く参道を少し歩いたところに無明橋という小さな橋がある。この橋の裏には無数の仏様やお経が掘られており、橋を渡ると身体が浄められると言う。
- ・ 鍵掛けの風習もその一つである。紅葉の名所で知られる大山環状道路（昔の作州道）の鍵掛峠や日野郡日南町多里から国道 183 号線を広島に抜ける峠も鍵掛峠と言い、この清めの風習が行われた場所といわれている。
- ・ 遠藤氏が昔、父親に連れられて大山参りをしたときの話として。

☞ 伝承者 遠藤勝壽氏：

- ✓ 大山寺の少し手前で休憩を取った。そこには川が流れており、「ここで待っていなさい、鍵掛けさんに鍵を掛けてくるから」と言って、父は林の中に入っていった。
- ✓ 残念ながら鍵を掛けたところは見たことがなかったが、鍵型の木の枝をご神木のよいうな木に投げあげて引っかけていたのではないかと語る。
- ・ そこは、坊領（大山口駅）から上がってくる大山みち沿いにあり、道端から小さな河原になっていた。川の水を飲んだり、汗を拭いたりして父親の帰りを待ったと語る。
- ・ その川が精進川であり、金蓮聖人が寂静されたという寂静山の麓の谷を源流にして日本海にまで注いでいる。
- ・ その場所は県道大山 - 佐摩線を大山寺から少しくだり、大山館観光道路から続く通称天皇道路と交わる交差点の辺りである。少し林の中に入ったところに小さな祠があり、それを囲うようにして石垣の跡が残っている。鍵をかけることにより身を清め神聖なる大山寺に参る準備を整えたのだろう。また、精進川で水を飲んだり、汗を拭いたりすることも一つのお清めの儀式ではなかつたらうか。

- ・ 大山で旅館を営む足立氏によると。

☞ 伝承者 足立修氏：

- ✓ 鍵掛けの風習は、山の幸せや身の安全を祈って行われた。
- ✓ また、12 歳の男の子（地方によっては 2 才と 10 才の時）に初めて大山参りをする風習がある。霊場である大山の神様に縁を結ぶと言うことで、二股の枝で鍵型を作り石仏に供えた。子どもの無病息災や健やかな成長を祈ったものであると語る。

< 大山を守る四角山王 >

- ・ 大山寺縁起の第二段には大山を守る山王が描かれている。
 - ✓ 又都率天第十六院宝光菩薩あまくだる。ここには智勝仙人と申すなり。三千六百日十一面・虚空蔵・不動明王・毘沙門等の四人の大土を安置して行ひければ、かたちを四所に現じて四の角に居して、弓矢を取り太刀・刀を持って各の西戒防衛の誓ひをおこし給ひき。今の木の目岩の目劔石と申す四角山王是れなり。是れより権現の神徳をかざり山王の垂迹をあげめ此の山を大神山と名づけたり。絵にこれ在り。
- ・ 応永5年(1398年)8月大山寺縁起をもとにして、備前の入道了阿が書いたとされる大山寺縁起絵巻の中にも描かれている。第一巻にあるその絵には、地蔵菩薩を守るように木目石目劔動として四角山王が描かれている。
- ・ 600年以上も前から伝わっていたこれらの伝承を、今の大山で垣間見ることができる。
- ・ 米子市文化財保護審議委員を務める川上氏によると。
 - ☑ 伝承者 川上迪彦氏：
 - ✓ 木の目山王は作州道、劔の目山王は坊領道、動の石山王は赤崎道にある。
 - ✓ もう一つ岩の目山王は、米子方面からの道の赤松の辺りにあったのではと語る。
 - ☑ 伝承者 清水谷登氏：「大山探訪」
 - ✓ 古くは、大山寺に通ずる四つの大山道と言われている横手道、尾高道、坊領道、川床道には山王と仁王をおいていた。古地図によると、横手道には木目山王、尾高道には仁王堂、坊領道には鍵掛け山王、そして川床の倉吉道には動石山王がありこれが現在川床道にある烏枢洪摩明王とある。
- ・ 横手道の旧大山道に紀成盛が寄進したという鳥居がある。その傍らに木ノ目地蔵というお地蔵さんがあり山王堂跡と言われている。これが大山寺縁起絵巻に描かれている「木の目」山王ではないだろうか。
- ・ 大山寺から赤崎方面に抜ける川床道を行くとスキー場の傍らに烏枢洪摩明王という像がある。この像にまつわる様々な伝承もあるようであるが、これが大山寺縁起絵巻に描かれている「動の石」山王ではないだろうか。
- ・ そして、坊領道の傍らの林の中にある古い祠が「劔の目」山王すなわち「鍵掛」山王ではないだろうか。
- ・ 残る一つ「岩の目」山王については、いろいろと意見が分かれているようである。
- ・ 江戸時代、大山山内の行政の中心であった、本院西楽院に伝わっていた古文書を解説した大山寺本院西楽院要用雑録によると。
 - ☑ 伝承者 難波睦人氏：「大山寺本院西楽院要用雑録」
 - ✓ 山内の堂社の修復について定めた件に、次のような記述がある。
 - ✓ 汗入り道の山王修復の時・・・中門より人足等これを出し候
 - ✓ 西明口山王修復の時・・・人足等西明よりこれを出す
 - ✓ 河床東の山王は・・・中門より人足等差し出し候事
 - ✓ (此の山王の事、当山の旧記には「四角山尾と言う社にて、当山開闢の砌鎮座の神

にて、由緒これ有る神也」いつ頃よりか“山王、山王”呼び習い、終に日吉山王社の取り扱いに致し来り候。祭礼も四月中の申の日 法楽致し候)

- ✓ 山王の所在
- ✓ 1. 西明口 2. 汗入り道 3. 河床の東 4. 本社の傍ら 四力所也
- ・ ここで言う西明口とは、横手道にあった「木の目」山王のこと。汗入り道とは、坊領道にあった「劔の目」山王（鍵掛山王）のこと。川床の東とは、川床にあった「動の石」山王のことである。そして、江戸時代に大山寺に伝わっていた四つ目の山王は、「本社の傍ら」すなわち大智明大権現社（大神山神社奥の院）の傍らにあったことになる。
- ・ 山王が昔どこにあったかは別として、数百年前のものがたりがこの大山で感じられる。大山寺縁起絵巻に書かれている四つの山王に昔へのロマンが浮かんでくる。

= 大山寺中興の祖 “豪円僧正” =

- ・ 実在した大山寺の僧侶の中で一番有名な人が豪円僧正であろう。
- ・ 江戸時代の約 300 年の間が大山寺の最も輝いた時代である。そのよき時代の基礎を作り上げたのが、この豪円僧正である。豪円僧正は、徳川家康とも親交があったと言い、その人脈を活かした交渉術と持ち前の実行力で多くの寺院を再興させたという。
- ・ 大山参りをする民衆のために、並木松を植えるなど多くの業績が伝わっている。

< 参詣者の道しるべ “並木松” >

- ・ 大山観光道路を登っていくと、道の両脇に大きい松の木が立っている。
- ・ 昭和 40 年代、私が子どもの頃、バスや車でスキー場に向かうとき道の両脇にある並木松が雪の重みで車道に覆い被さっていたのがとても印象的であった。
- ・ この松を植えさせたのが「豪円僧正」である。

☞ 伝承者 足立修氏：

- ✓ 当時、人々の大山寺に対する信仰心は非常に熱かった。医学が発達していなかったので、村で急病人がでると夏冬、昼夜、風雨、吹雪などお構いなしに、村の代表が「大智明権現」の救いを求めて大山寺に上がってきた。
- ✓ そのため不慮の災難に遭うものが後を絶たなかった。
- ✓ 慶甲 7 年（1602 年）、参拝者の苦難を見かねた「豪円」は、当時山奉行に命じて、坊領、赤松、溝口の三道に道標として「大山参道並木の松」を植栽させたという。
- ・ 溝口道の松は、明治維新の際に民間に払い下げられてほとんどが伐採された。坊領道、赤松道の並木松は昭和 50 年頃まではかなりの松が残っており、坊領道で 17 本、赤松道で 48 本が大山町の保護文化財に指定された。

☞ 伝承者 遠藤勝壽氏：

- ✓ 昭和 62 年大山有料道路(現在の大山観光道路)が日本の道 100 千に選ばれた頃は、きれいな並木松が続いていた。
- ✓ 舗装などにより地盤が堅くなったこと、木々が生長して風通しが悪くなったこと、排気ガス、老化などの影響により次第に姿を消していったのではないかと語る。

- ・ 昼夜を問わず大山に参った信仰心とそれに答えようとした豪円僧正の心が長い年月をかけて大きくなった並木松に垣間見ることができる。この松が大山に対する信仰心のシンボルとするならば、その数が年々少なくなっていくことに対する寂しさを感じる。
- ・ 近年、森林管理署や環境省を中心として2代目の並木松を育てようとする試みが行われている。現在、高さ1mぐらいまで育っているが、この松が大きくなる頃にはどのような大山になっているだろうか。

< 養蚕の歴史と雪室 >

- ・ 弓ヶ浜では昔から養蚕が盛んであり、たばこの生産が本格化するまでは桑の生産が主流であった。製糸工場などもあり、この地方の一大産業となっていた。
- ・ この養蚕の技術をこの地方に伝えたのが「豪円僧正」だといわれている。

☑ 伝承者 足立修氏：

- ✓ 豪円僧正は、殖産のために但馬から蚕の種を取り寄せ寺領内に養蚕業を広めていった、そのうち江戸時代も末期になるとこの養蚕業が寺領外にでて広く藩領にも普及していった。特に弓浜地方では、今まで綿や綿花が一大産業であったが、桑がその4~5倍で取り引きされたため、農民たちは先を争って綿から桑へと作付けをかえていった。当時を知る浜の古老が「綿の木抜いて桑の木植えて、ワアチャ(お前たち)食う気が桑の気(食わぬ気)か」と呼んでいたという。
- ✓ 昭和の中頃まで「春大山」と言われた5月24日の春の大祭になると、「豪円山」山頂の豪円地蔵が真っ白になるほど真綿で巻かれてあった。この地方に養蚕業を広めた「豪円僧正」に対して、農家の人たちが感謝の気持ちと養蚕業のますますの発展を祈ってお参りしたものだと言っている。

- ・ 釈迦堂跡の直ぐしたに大きな雪室がある。冬に降った雪をこの雪室に詰めて覆いをかぶせて解けないようにする。標高が高く涼しい大山では夏を過ぎても氷が溶けない。

☑ 伝承者 遠藤勝壽氏：

- ✓ 昔この雪室で蚕の卵を冷やしていた。
- ✓ 蚕の卵は春になり、暖かくなると一斉にふ化してしまう。この雪室で蚕の卵を冷やしておき必要なときに雪室から出して育てる。桑の葉の成長に合わせて養蚕ができる。春に育てる蚕を「春蚕(はるこ)」、夏に育てる蚕を「夏蚕(なつこ)」秋に育てる蚕を「秋蚕(あきこ)」と言い年3回蚕を育てていたという。
- ✓ 伝承者の実家は、大山町妻木の農家であるが、昭和20年頃まで自宅で蚕を飼っていたという。自宅には部屋が4つあり、蚕を飼う時期になるとその内2つの部屋を使って養蚕をしていたという。

- ・ 養蚕の歴史が豪円僧正から始まったと言うことは、余り知られていないが豪円僧正の大きな功績といえる、昭和の中頃まで300年以上にわたり伯耆地方の経済に影響を与えつつあったことになる。

2. 学僧? 然 ものがたり

<? 然とは>

- ・ ? 然は、江戸文化の円熟期を迎えていた寛政 8 年 (1796 年) に生まれた。
 - ・ 大山寺の僧侶として修行をする傍ら、書画の才能に秀でて学僧として生涯多くの作品を地元に残している。晩年、大山寺を下り風流三昧な生活を送ったと伝わっているが、人物像、修行の様子、墓所さえはっきりせず謎に満ちた人物である。
 - ・ 謎多き人物であるだけに、なぜか魅力を感じさせる。

 - ・ 文化 3 年 (1806 年) 当時 11 才の時、大山寺に上がり観解院に入った。翌年、剃髪して仏門に入り台貫と名のつたという。師の円流院主台賢は、当時の大山において最も優れた学僧で、大山寺境内に残る供養塔や銅鐘の金石文にも名を残す功労者であった。
 - ・ 台貫 (? 然) はよき師を得て仏学に、優れた詩文書画ともに才能を伸ばすことになる。
- ☑ 伝承者 畠中広氏 : ? 然書画集
- ✓ 二世紀半に及ぶ大山寺近世史は、数々の英僧、学僧を生み出した。
 - ✓ その中であっても、もっとも庶民に知られ、愛され、親しまれたと人はといえば、やっぱり? 然があげられる。

 - ・ ? 然は、「千枚書き」と呼ばれるほど数多くの書画をこの世に残している。
 - ・ 僧侶としての修行の傍ら山を下り、伯耆一円と安来を中心とする出雲東部の豪農豪商のもとで多くの書画を描いた。いわば、大山を見ることのできるごく限られた地域の人々から求められ、絵画を残した土着性の高い画家と言える。

<? 然は何を求めたのか>

- ・ ? 然の人柄を物語る伝承に次のようなものがある。
 - ✓ ある人が、? 然に大山寺山内の人数を訪ねたところ。
 - ✓ 彼はただ三人だけであると答えた。すなわち、一人は洞明院の大若 (禅信) もう一人は自分、他の一人はその他数十百人をまとめて一人だと。
- ・ このような言動が受け入れられず大山寺を追われたとの説もある。

- ・ 江戸時代後半にさしかかり、庶民文化が広がりを見せていた。地方の豪農や豪商は、書画を求める気運が高まっており、京から絵師を迎えて絵画を描かせるものも現れた。
- ・ 絵師という職業が確立されてきた時代であり、漁師の息子が絵師になる夢を持っても不思議ではなかった。自叙伝にもあるように、彼は 6 才にして早くも絵心があり、指で砂に馬を描き、爪で壁に牛を刻したという。そして絵に対する思いが、ますます深まり、ついに 11 才で大山に登ったとある。
- ・ 絵の修行には、画材の購入などかなりのお金がかかり、修行をしながら生活するためには大山で学僧となるのが最も良かった。
- ・ 彼の大きな志は絵の道を究めることであった。
- ・ そして、修行の地「大山」で出会った仏教の教えと彼の美術的なセンスが融合して百五十年以上立っても人々を魅了する独自の世界を作りあげたのではないだろうか。

- ・ 今の世の中であれば、ごく自然に受け入れられる？ 然の言動も、江戸時代、それも大山寺の常識からすれば、かなりかけ離れていたことは容易に想像できる。
- ・ この自由奔放さが現代の我々に魅力を感じさせるところなのかもしれない。

< 皆生と大山をつなぐ？ 然 >

- ・ 自叙伝によれば、？ 然は寛政 8 年（1796 年）9 月 23 日夜、皆生村の漁師の家に生まれたという。父は多吉、母は阿岩といい、八幡氏と称している。
- ・ 当時、皆生（海池）村は戸数約 70、人口約 300 の半農半漁の海岸であった。皆生で八幡氏と言え、天正年間（1580 年代）皆生を開墾した八幡新兵衛の一族であろう。もとをたざせば平安時代に大智明権現社を寄進した紀成盛の一族であるといわれている。

☐ 伝承者 清水谷登氏：中国新聞「大山探訪」

- ✓ 嘉永 3 年（1850 年）？ 然 55 才の時に大山を離れた。
- ✓ 日野川岸の八幡村の末次氏を頼って草庵を営み「六奇楼」と名付けた。自らを「迎嶽観主人太虚」と号し、風流三昧の日々を送ったとある。

- ・ 梅翁寺に残る過去帳によると父多吉が天保 13 年（1842 年）母阿岩弘化 3 年（1846 年）兄弟である良吉が嘉永元年（1848 年）相次いでなくなっており、この身内の死が大山を離れるきっかけとなったのかも知れない。

☐ 伝承者 大原俊二氏：「？ 然書画集」

- ✓ ? 然は弁当箱と称される漆塗りの箱がある。
- ✓ 蓋の裏側に黒漆地に金蒔絵で蟹の泡を吹く図が描かれている。引き出しの底もやはり、黒漆地でその上に朱で次のような画賛（現漢文）がある。

むちょう ねんごろ
無腸の公子、座営は 慳 に

ずいしょ おうこう かくすい しつ
随處に横行す、客水の湿

じゃくつせんけ さりゅう す
蛇窟？ 家、砂流の洲、

まんせん これ ぼうきん
萬千の玉を吐くは是、房金

- ✓ 「蟹は自分の座るところを作ることについて非常にていねいで、にわか雨で不意の増水したあと、気持ちよさそのような湿気のある場所を探して、あちらこちら勝手気ままに歩き回っている。そして、探し当てた蛇や魚の棲む流砂でできた洲のほとりに居候をきめこんで、玉のように美しい泡を吹き出しては、それを宿代がわりだとは、面白い。」
 - ✓ 「無腸公子」すなわち「蟹」？ 然自信の象徴である。一生の念願である画道を追求して、大山寺における僧務の余暇にたくさんの「玉」を宿代にしながら「随處に横行」するという所信を述べている、そして「玉」とは？ 然の画く絵であろう。
- ・ この詞を読むと？ 然が幼少の頃、皆生の砂浜に指で馬の絵を描いていた光景が浮かんでくる。

< 弥山禅定の秘密 >

- ・ 大山は、山自体が信仰の対象であり、神聖な場所として登ってくる人たちを浄める仕組みがつくられていた。特に、大山の山頂は、最も神聖な場所とされ、明治時代になってからも一部の宗教的な行事を除いて山頂への登山は認められていなかった。
- ・ 江戸時代まで大山山頂で行われていた弥山禅定という行事がある。

☑ 伝承者 ? 然 : 「大山雑記」

- ✓ 新しく選ばれた行者二名は、毎年5月にお堂に入り、法華経をそれぞれ写経する。
- ✓ 6月14日の夕方、先導者三名と共に山頂に登り、写経したお経を納め、15日の朝に下山する。これを弥山禅定という。

- ・ 以前に登ったことのある行者と共に5名で山頂を目指したようである。毛筆や膠墨を使わず、稲穂の心の部分で筆を作り赤土を墨に見立てて写経を行った。

☑ 伝承者 大館禅雄氏 :

- ✓ 将来有望な僧侶が行者として選ばれ、いわば若手僧侶の登竜門的な場ではなかっただろうか。選ばれた行者は、阿弥陀堂に籠もって写経を行った。
- ✓ 写経する間、行者たちは自らの僧坊に帰らず、釈迦堂跡の上にあった天狗屋敷というお堂に寝泊まりした。弥山禅定の経路は、現在の釈迦堂跡から五合目の辺りに抜ける道があり、その道を登り弥山を目指したという。
- ✓ 墨の代わりに使った赤土であるが、自分が先代住職である父親から聞いた話では、下山キャンプ場にあるモミノキの根っこから掘り出して使ったと聞いている。自分も行ってきたが確かに土を掘った後があったと語る。

- ・ 弥山禅定の写経で使う赤土について杉本氏によると。

☑ 伝承者 杉本良巳氏 :

- ✓ 呼滝山（現在の豪円山）の裏山に良質な赤土がでるところがある。
- ✓ その下には鉢跡もあり鉄分を含む赤土が取れたのではないかと語る。

- ・ 赤土を取った場所についてはいろいろな話が伝わっているが、時期によって取る場所が違っていたのかも知れない。

☑ 伝承者 ? 然 : 「大山雑記」

- ✓ 5人の行者が弥山禅定から降りてくると本社に下りるまでの道に信心深い老若男女が横たわり、その光景は船の棧橋のようである。みんながからだの悪いところを踏んでもらえるように願った。悪いところを踏んでもらうと、病に効くと言われていたからである。
- ✓ 行者たちが山中の草木を取ってきて、その人たちの中に投げ込むと、先を争って奪いあい、天地を動かすほどの騒ぎとなった。この草木を病気のものに飲ませれば、みんな病気が癒え、すべての病気を取り払うことができるという。

☑ 伝承者 大館禅雄氏：

- ✓ 先々代の住職「禅空」(大正11年8月19日没)の話によると。
- ✓ おびたしい人が元谷の河原を埋め尽くし、寝ころんで行者が下りてくるのを待っていたようである。弥山禅定に使った草鞋も人々に配られ、馬や牛の餌に混ぜて食べさせ牛馬の健康を願ったという。
- ✓ 下山のルートは、いわゆる行者谷を元谷に向かい下りてきた。元谷を抜け現在の治山道路を通り、大智明大権現社に弥山禅定の報告を行ったという。

= 歴史から消えた「大山寺」 =

< 明治維新と神仏分離 >

- ・ 明治維新の新政府が宗教政策として掲げたのが神仏分離の方針であった。

☑ 伝承者 大山町誌：

- ✓ 明治8年(1875年)9月30日 古い歴史を持った大山寺も、一片の司令書によって大山寺号廃止という悲運に見舞われた。社殿神具は大神山神社へ、仏体仏具は大日堂(現大山寺本堂)へ、神仏いずれとも区別しがたいのは、破碎して折半されたが、このとき什器宝物など四方へ散逸してしまったものが多かった。
- ✓ 明治9年(1876年)2月14日 伊集院参事からの指令によって本坊であった西楽院も取り壊された。大山の主神として崇敬されてきた智明権現の仏体、地藏菩薩を安置した、大日堂を地藏堂と名をかえ、これを大山寺本堂として再興を願ったが、なかなか許されなかった。

< 大山寺号復活への道 >

- ・ 檀家を持たなかった大山寺の寺坊にとって大山寺号廃絶は、想像を絶するダメージであった。経済的に追い込まれ、大山を離れていく僧侶も多かった。寺男たちが雪室でつくった大山氷を売り歩いて生活の糧としたといわれている。
- ・ 当時のことについては、屈辱的な思いであるためあまり多くのことが伝わっていない。

☑ 伝承者 大館禅雄氏：

- ✓ 伝承者の父から聞いた話として。馬におわれて多くの仏像やお経が大山から持ち出された。宝物もそうであるが、古文書がなくなっていることが残念だ。
- ✓ 紙の質が良くふすまの下張りに使われたという。寺坊を離れる僧たちもあり多くの寺坊が朽ち果てていった。自分の寺を守るのが精一杯で朽ちていく他の寺のことを面倒見る暇はなかった。

☑ 伝承者 清水正憲氏：

- ✓ ほとんど聞いていない。お寺の器物を売って食いつないでいたのではないだろうか。
- ・ 明治34年(1901年)歴史学者沼田頼輔が米子中学に赴任し、大山研究を始め、大山寺を復活させようとする動きがでてきた。
- ・ 明治36年(1903年)10月ようやく大山寺号の復活が許された。11ヶ院を持って大山寺とし、中門院谷の大日堂を大山寺本堂とした。

3. 大館禅雄ものがたり

<洞明院第10 第住職>

- ・ 大館禅雄さんは、洞明院第10 代目の住職である。
- ・ 平成12 年より大山山内の寺坊の中心である天台宗別格本山大山寺の住職となった。現在、洞明院と円流院の住職は息子に譲ったが、宝運院、禅智院、蓮浄院、寿福院の住職を兼務（二つ以上の寺院の住職を兼ねていること）している。
- ・ 洞明院は、江戸時代中期初代「禅澄」宝永6 年（1709 年）3 月13 日没によって開かれたという。江戸時代まで大山山内は、女人禁制であり、もちろん僧侶は婚姻ができなかった。各寺坊も血縁による世襲ではなく、弟子を育てて後継者とする事で寺坊が引き継がれていった。

☑ 伝承者 大館禅雄氏：

- ✓ 寺坊にとっても大山寺繁栄のため弟子を育成することが山内の住職の勤めであった。弟子をたくさん持っている寺坊の発言力は自ずと大きくなった。
- ✓ 洞明院が江戸時代中期に設立されたというのも、修行を積み新しい住職となれるものがいると、以前にあった寺号を使った新たなお寺を造ったのではないだろうか。
- ・ 江戸時代は大山寺の寺で修行することは名誉なことであり親戚一同喜んだという。今でも島根県伯太から昔の住職の墓参りに来られる方がいるそうだ。
- ・ 大山寺には近在近郷から小僧さんが集まってきた。彼らは寺の後継者ではなく普通の子どもであったという。年端もいかない小僧さんにとって寺の生活は厳しいものであり、直ぐに帰った者もいたという。
- ・ 大山寺山内は女人禁制であり、参道の鳥居から先は女性が入ることはできなかった。しかし、各寺の離れに面会所があり、小僧さんとお母さんとの面会が許された。
- ・ 実際に洞明院も第8 代の「禅空（大正11 年8 月19 日没）」までは血縁関係はなく、その後血縁により引き継がれているようだ。

<大山寺のくらし>

- ・ 昭和2 年、大館禅雄氏は大山寺洞明院の住職の次男として生まれた。子どものころから大山に暮らしており、戦前からの大山寺の様子を良く知る一人である。

☑ 伝承者 大館禅雄氏：

- ✓ 戦前の寺坊の生活は厳しく、営林署から炭を焼く許可をもらい炭焼きをして生計の足しにしていた。中ノ原から豪円山にかけて雑木林であった。豪円山の下にある体育館の辺りに炭焼き小屋があり、近くの雑木を切っては炭にして米子などに売りに行った。炭焼きで木がなくなったところでスキーをしていた。
- ✓ 雑木の炭は質が良く、特にミズナラが一番良質な炭となる。同じ雑木でもクリの炭は質が悪い、火をつけると“はぜる”のでこたつなどに入れると火事になってしまった。
- ✓ ミズナラの炭か、クリの炭か見分けが着けば一人前であった。

- ・ 大山での生活ではスキーは欠かせなかったという。
- ☑ 伝承者 大館禅雄氏：
 - ✓ 子どもの頃からスキーは好きだった。学校に上がるまでにスキーが出来るようならないと、学校に行ってから遊んでもらえなかったので、みんな必死に練習したものであった。円流院に祝原さんというおじいさんがいて教えてもらった。
 - ✓ 木のスキーを買ってもらっていたが、すぐ壊れるので直しながら使っていた。その日のうちに直しておかないと次に日に学校にも行けなかった。
- ・ 雪の深い大山では、冬になると地域の人が当番で道をあけた。地区毎に担当が決まっており、大館さんの地区は南光河原の担当であった。大変な作業であったがみんなが協力して作業していた。もちろん学校にもスキーで行っていた
- ☑ 伝承者 大館禅雄氏：
 - ✓ 洞明院から南光河原を越えて分校までスキーを履いて通っていた。小さい子どもには大変な道のりであった。
 - ✓ 小学校の体育の時間は、1年生から6年生まですべてスキーであった。もちろん体育館などない時代、目の前にあった博労座のゲレンデが教室となった。
 - ✓ 学校が終わってからの遊びもすべてスキーであった。
- ☑ 伝承者 清水正憲氏：
 - ✓ 自分たちの頃も小学校にスキーで通っていた。
 - ✓ というよりもスキーでしか行けなかったと語る。
- ・ 清水さんは、昭和16年に大山寺観證院に生まれ現在は住職をしている。戦後の時代までスキーによる生活が続いていたようである。

<スキーが支えた戦後の大山>

- ・ 昭和22～24年頃から大山にスキー客が増え始めた。岡山、広島などから大学生がたくさんつめかけた。溝口の駅から歩いて大山にあがってきて、帰りは滑って降りていた。
- ☑ 伝承者 清水正憲氏：
 - ✓ 大山寺まで木炭バスが登り始めたのは、昭和26～27年のことであった。
 - ✓ しかし、真冬の1月～2月は雪が多く赤松までしかあがらなかった。雪が少なくなる3月になると大山寺の住民総出で雪かきをしたものであった。まだ舗装されていない旧道を赤松から博労座までの道をあける。各家からスコップを持ってみんなが手伝った。人が来ればお金になるのでみんな一生懸命であった。
- ・ まだ小学生であった伝承者であったが学校になんか行かなくても良いから雪かきをしなさいと言われていたという。

☑ 伝承者 大館禅雄氏：

- ✓ 戦後はスキーが大山を支えてくれた。雪が降れば、一年分の収入が入ってきた。
- ✓ 最初は列車のお客が多かったが、便利が悪くバスに変わっていった。当時、西鉄バスが九州各地からスキー客を運んできてくれた。西鉄の運転手たちは自分たちが大山のスキー場を支えているのだという自負を持っていた。立ち往生したときでも、少しでも苦情を言うと「我々のお陰でお客様が来ているのだ、バスを直せ」と反対に叱られたものであった。

☑ 伝承者 木田達二氏：

- ✓ 昭和 30～40 年代にかけてどんどんお客さんがきた。夜行列車福山号、銀嶺号などが運行しており、九州や岡山（福山）などからお客様を運んできた。
- ✓ 夜行列車は、朝早く米子駅に着く。バスで大山にあがると博労座に到着するのが朝 5 時頃になる。まだ真っ暗なので旅館の名前の付いた提灯を持って迎えに行った。

< 議員「大館禅雄」が手がけた三つの大仕事 >

- ・ 戦時中予科練習生として飛行機に乗っていた大館氏であったが、戦後まもなく大山に引き上げてきた。戦争時代のお話もたくさん聞いたがまた別の機会に紹介したい。
- ・ 大山寺で青年団活動を続けていたが、町議会議員に担ぎ出されたという。そして、初当選したのが昭和 30 年 11 月 28 才の時であった。
- ・ 当選してみたら同僚議員はみんな父親と同世代の人ばかりで、大変困ったことを覚えているという。
- ・ その時、大山寺の代表として立候補した公約が次の 3 つであった。
 - ✓ 道路舗装
 - ✓ 上水道の整備
 - ✓ スキー場のリフト設置 であった。
- ・ いずれも一筋縄ではいかないものばかりであった
- ・ 一期目の終わる昭和 34 年頃、県道の舗装工事が始まった。大山は国立公園ということもありいち早く着工の運びとなった。それも大山寺の方から麓の方へと舗装するものであり少し誇らしかったという。
- ・ それまで大山寺の飲料水は、南光河原から直接土管で水を引いていた。そのため大水が出るといつも壊れて村人が直していた。また、落ち葉などが溜まり、土管が詰まること がしばしばあった。
- ・ 簡易水道が広まり始めた頃であり、いち早く取り組んだのだが、大山には水源がなかった。地質学の先生にいろいろと相談したがいい知恵がでてこなかった。
- ・ そこで、金門の少し下の南光河原に大きな穴を開け、そこに溜まる水を水源とすることを思いついた。この方法がうまくいき大山寺初めての上水道となった。
- ・ 素人の知恵ではあったがこんなにうまく行くとは思わなかったと語る。

- ・ 一番苦労したのは、スキー場のリフトであった。大山寺から選出されている議員は、もちろん一人。観光事業に関心のある議員は他に一人もいなかった。
- ・ ましてやまだあまり知られていなかったリフトなどとてもない話であった。親子ほど離れた先輩議員に話してみても取り合ってもらえなかった。
- ・ 議案の上程まではこぎ着けたものの賛成 1 反対後全部で否決となった。その時は、さすがに辞任して帰ろうと思ったと語る。
- ・ 当時、町議会議長の田中義友さんが自分に任せろと言われたので、その言葉に従った。すると次の臨時議会に上程されたら議案が通過してしまった。初代の山根村長がやると決めた、議会が従ったのだ。

< 中ノ原スキー場の開発 >

- ・ それから本当の苦労が始まった。

☑ 伝承者 大館禅雄氏：

- ✓ 信越のスキー場は何基かリフトがあったが、関西には神辺に木柱リフトがあっただけであった。業者の案内で箱根のゴンドラリフトや各地のスキー場を視察した。
- ✓ そして、本格的な着工を前に運転の責任者が必要となり、当時の産業課長渡辺さんと一緒に志賀高原で行われた技術講習会に参加した。難しい技術的なことは全く分からなかったので、居眠りばかりしていたことを覚えている。(笑う)

- ・ リフトの位置をどこにするかも大きな問題であった

☑ 伝承者 大館禅雄氏：

- ✓ 当時、中ノ原スキー場のあった宝珠山は、戦時中に畑にしていた一部を除き一面雑木林であった。どこにリフトをつければいいのか皆目見当もつかない状況であった。
- ✓ そこで山崎^{きよ}瑛子さんの人脈から猪谷千春選手の父親である猪谷邦雄さんを招いた。猪谷氏は竹竿を二本用意させ、役場の職員がその竹竿を持ち、一本は山の上に持って上がり、もう一本は山の下に持って降り、二人に高い木の上に登らせた。猪谷さんは真ん中にいて、右に行け、左に行けと指示を出していった。
- ✓ こうやってリフトの乗り場と終点が決まったのであるが、リフトが着くまではなぜそこにつけたのか分からなかった。リフトが着いてみて初めて絶妙の位置に着いていることが分かった。何でこんなに上手にリフトが付くのか不思議であった。

- ・ このようにして昭和 31 年中ノ原スキー場に大山で初めてのリフトがついた。ここから西日本のスキーのメッカといわれた大山のスキー場の歴史が始まることとなった。

- ・ こうして大山寺にとって大きな意味を持つ 3 つの事業が完成し、昭和 38 年大館さんは 2 期 8 年勤めた町議会議員を勇退した。
 - ✓ とにかく時期が良かったと、うれしそうに議員時代を振り返った。

< そのほかのスキー場開発 >

- ・ 上ノ原スキー場は、中ノ原スキー場のオープンの3年後にあたる昭和35年にできた。
- ☑ 伝承者 木田達二氏：
 - ✓ 大山町が開発した中ノ原スキー場の東側の松林がその場所であった。佐摩の元村長谷村さんの協力により、計画は順調に進んだ。時期を同じくして豪円山でもスキー場の計画が進んでいたため、同時に運輸省へ申請を出し、同じ年にオープンした。
- ・ 当時、地元の金融機関に勤務していた伝承者は、仕事が終わると大山に手伝いに上がっていた。開業前のスキー場に入ったときのことを良く覚えているという。
 - ✓ 背の丈ぐらいの熊笹をかき分けて山に登っていった。一番高いところまで上がると眼下が見渡せた。もどるときも道なき道を迷いながら降りていったという。
- ・ 国際スキー場は、昭和45年大山国体の開催される2年前にオープンしている。
 - ✓ 昭和40年頃 中ノ原と上ノ原スキー場のある宝珠山の東側の山を広島県三原の学校法人の経営者が買収していたようだが、開発されなかった。
 - ✓ その後、大山で国体を開催することが決まったが、会場がない。そこで当時、すでに土地の権利を買い取っていた日本交通が国際スキー場の開発に乗り出した。
- ・ 私(昭和39年生まれ)も小学校に上がる前から両親に連れられてスキーに行っていた。よく国際スキー場に来ていたが、今考えるとオープン間もないころであった。
- ・ 当時の国際スキー場は、とにかく人であふれていた。初心者のゲレンデは、ゲレンデの3分の1の辺までリフト待ちの列がつながっており、裕に1時間はリフトを待っていた。また、中級コースのパラダイスゲレンデは、リフト待ちの列が川床道に長くつながり、烏枢波摩明王像の前を越えて続いていた。
- ・ もちろんそのころは駐車場も少なく、仁王茶屋の駐車場の少し下から観光道路の路肩に駐車して歩いて大山寺まで上がったものであった。早く上がらないと良いところに車が止められないため、朝早くたたき起こされてスキーに行ったものである。
- ・ 昔は、大らかなもので帰りはスキーを着けたまま道路や路肩を滑って車のところまで降りていた、今考えると少し危ないような気がする。

< 悲願の大山国体 >

- ・ 昭和32年にリフトが付き近代的なスキー場への道を歩き始めた大山であるが、その頃の競争相手は兵庫県の神辺スキー場であった。客の数では負けていなかったが、昭和32年、昭和40年に2回の冬季国体の誘致に成功し、全国的な認知度を上げていた。
- ・ 冬季国体を開催すると、周辺の基盤の整備も同時に進むため、いつかは誘致しないと競争に負けてしまうという思いが大山にわき上がった。
- ・ 昭和47年大山スキー場の悲願であった大山冬季国体の開催にこぎ着けた。
- ☑ 伝承者 大館禅雄氏：
 - ✓ 長年、全日本で選手として、そして当時は役員として活躍されていた山崎^{きよ}瑛子さんの力が大きかったと思う。

- ✓ 最初は国体なんかできると思っていなかった。草大会はやっているが、大きな大会は誰も経験がなかった。きちんとしたコースを作らなければならなかった、昭和45年国際スキー場が完成しなにかコースができあがった。
- ・ 大館氏は、当時アルペン部門の副委員長を勤めたという。とにかく雪がなかったことを覚えている。雪を集めようと思っても集めてくる雪がなかった。
- ・ たまたま環状道路に雪があり、自衛隊などの協力により運んできた。平たく伸ばしてしまうとすぐ解けてしまうので、大きな山にしてスキー場に置いておいた。
- ・ 開会式の前日から雪が降り出し、ほっと胸をなで下ろしたのもつかの間、大変な問題が起きた。積んであった雪山が凍ってしまったのだ。急いで大山農協から開墾用のクワを借りてきて、役員総出で山を崩した。
- ・ とにかく大変な作業であり、せっかく集めた雪も使わずに終わった。
- ・ 札幌オリンピックのすぐ後の開催であり、ジャンプで金メダルを取った笠谷選手などに注目が集まった。また、地元からもオリンピックに出場を果たした大杖さんなどに期待がかかったが結局、大杖さんは振るわなかった。
- ・ しかし、開会式で選手宣誓をした椎木喜久男さんが地元の声援に応え、大回転壮年の部2位、同じクラスに出場した宮本さんも8位となった。
- ☑ 伝承者 椎木喜久男氏：
 - ✓ 大山国体の時は雪不足で練習ができなかった。他の選手も雪不足で練習をしていなかったのだろう。選手といっても選手だけやっていればよかったわけではない。役員の仕事もあり、資材係としてトタンを運んだりしていた。
 - ✓ 大会当日も雪が降り、誰も滑ってないコースなので新雪がたまっていた。一番スタートであったので、滑っていると雪が向かってきた。
 - ✓ 一番目の選手のタイムを目標として後続の選手が滑ってくるのだが、北海道の芹沢という選手が自分より0.01秒早く優勝した。
- ☑ 伝承者 木田達二氏：
 - ✓ 資材係長として大会の運営に当たった。チャンピオンコースのゴールから翌日のスラロームのゴールであるリーゼンコースまでベニヤ板を運ばなければならなかった。スノーモービルにも乗らず歩いて運んだことを覚えている。
 - ✓ スタート地点で暖を採るため灯油缶と炭を運んだ。
- ・ これに続き大山スキー場では、平成5年に冬季国体が開催された。
- ・ 現在、全国に冬季国体が開催できる都道府県は14あるという。
- ☑ 伝承者 木田達二氏：
 - ✓ 平成20年の冬季国体の開催地がまだ決まっておらず、大山スキー場としては是非誘致したい。定期的に大きなイベントをやらないとお客様から忘れられてしまう。
 - ✓ 国体をする事になれば、大山のイメージアップにもなり、施設の整備も進む。選手の強化にもお金が掛けられ、選手たちにも目標を持たせることができると語った。

4. 豆腐屋 ものがたり

<大山の嫁入り>

- ・ 兜山富子さんは、米子市古豊千の米屋の長女として大正 10 年に生まれた。
- ・ 26 才の時、大山寺で明治維新から豆腐屋を続けていた「とやま旅館」に嫁いだという。
- ・ 夫は、豆腐屋の三代目であり大山スキー創生期の名選手であった兜山登さんであった。登さんは大正 8 年生まれ 28 才であり、当時としてはかなり遅い結婚であった。

☑ 伝承者 兜山富子氏：

- ✓ 昭和 22 年 10 月 22 日祝言の日、家財道具をバスに詰め込み、花嫁衣装を着てバスに乗り込んだ。博労座で降ろされると、仲人さんが提灯を持って迎えに来ていた。
 - ✓ もちろんこの時点でお婿さんの顔など見ていない。嫁入り用の表付きの“ぶっくり”を履いて、山道を登っていった。石ころだらけの道に、何度も、何度もつまずいたことを覚えている。
 - ✓ 角隠しの中からおそろおそろ辺りを見回すと、だんだん山奥に入っていく。そこで、「分かった、分かった、26 才にもなる嫁入りは、姥捨て山に捨てられるのだ」と真剣に思ったという。(笑う)
- ・ ようやくたどりついたと思ったら、停電になってしまった。薄明かりの中で電話を掛けていた、登さんの後ろ姿を見たのが最初であった。その夜、停電の中で祝言が行われ、ハッキリと登さんの顔を見たのは次の日の朝であったという。

<豪円山の新婚旅行>

- ・ 嫁いで 4 日目、新婚旅行にでかけた。

☑ 伝承者 兜山富子氏：

- ✓ その朝、突然「新婚旅行に行くぞ！」と言われた。どこに連れていってもらえるかと思いついて付いていった。すると、山の中へどんどん入っていく、別に手をつなぐわけでもなく後を付いていった。見晴らしのいい山に登っていった。
- ✓ 当時、良いところに連れてきてもらったと思っていた。今になって思えば、豪円山登山であった。(笑う)
- ✓ 新婚旅行の間、人っ子一人、猿の子一人、会わなかった。ただ一人、サカグチの前で留守番のおばあさんが、「アラマア！」と言って見送ってくれたのを覚えている。
- ✓ 今の若い子は堂々と手をつないで参道を上がっているが昔では考えられないと語る。

<昔の暮らし>

- ・ 兜山富子氏の姑ヨシコさんは、豆腐屋初代のウメノジョウさんの娘に当たり、生まれたときから大山に住んでいた。その頃、大山寺では牛馬市や大山参りのお客様を対象とした宿坊をしているところが多かった。牛馬市が立つときは、分けの茶屋の辺で女将さんが前掛けして宿坊の客引きしていた。
- ・ 伝承者が嫁いできた頃でも、本当にこの家に人が住んでいるのかと思うようなランプの薄明かりの中で生活していた家があった。

- ・ 大山寺では藁屋の家に炉が切っており、炭や薪をたいて暖を取っていた。猟で取ってきたウサギや狸を鍋などにして、その中に豆腐などを入れたりしていたという。

☑ 伝承者 兜山富子氏：

- ✓ 昔はよく雪が降っていた。3mも雪が降ると玄関が雪で埋まってしまう。リンゴ箱で雪をかためながら外へ出た。むしろ二階の窓の方がすぐに外へでられた。
- ✓ 大山で使う生活用具も、嫁いでくるまで見たことがないものばかりだった。
- ✓ 「わらぐつ」履いて「和カンジキ」を付けて外に出た。「みの」や「笠」など被ったことがなかったので、付け方すら分からなかった。

< 細腕で支えた豆腐屋の歴史 >

- ・ 米屋のお嬢様であった伝承者兜山氏は、大山に嫁ぐまで豆腐など作ったことがなく、豆腐づくりは嫁いできてから覚えたという。

☑ 伝承者 兜山富子氏：

- ✓ 朝の4時、石臼で豆を挽くところから豆腐づくりは始まる。うちの豆腐は、昔ながらの硬い豆腐であった。「まめをこほどばかり、水をこほどばかり、にがりをこほどばかり」教えられた通りにしか豆腐を作れなかった。
- ✓ 特に、春5月の新緑の時期と秋10～11月の紅葉の時期が忙しかった。

- ・ 今の駐車場のところに池があり、大山の下がり水が湧いていた。その水を台所の土間に引き込んできて豆腐を作っていた。
- ・ 水があまりにも冷たいため豆をかしても上手くふやけない。そこで一度水をお湯にしてからから豆をかしていた。これも大山ならではの豆腐づくりかも知れない。
- ・ 今は清水を止めてしまったが、初代ウメノジョウさんはこの清水があったからこの場所で豆腐屋を始めたのかも知れない。

☑ 伝承者 遠藤勝寿氏：

- ✓ 大山登山の帰りに行者谷を通り、大神山神社から参道を降りていると、参道沿いの側溝に桶に入った豆腐が置いてあったものだ。
- ✓ その豆腐は冷たく冷えており、とても美味しかったことを覚えている、登山で疲れた身体に浸みいるような感じであった。

- ・ 兜山富子氏が嫁いできた頃のとやま旅館は、収容が30人ぐらいの民宿であった。スキー客は伯耆大山や赤松からリュックやスキーを担いであがってきた。香川や高松など四国からのお客さんが多かったと言う。
- ・ 昭和47年 参道沿いの建物を建て増したときに、豆腐の製造を止めてしまった。その増築により収容300人の大山一番の旅館となった。
- ・ 昭和45年頃から昭和60年頃までが最盛期ではなかったであろうか。お客様から、どんどん問い合わせがあり、部屋がなくても廊下でいいから泊めてくれと言われた。実際に洗面所の前の廊下に布団をひいてお客様を泊めたという。

☑ 伝承者 兜山富子氏：

- ✓ 夫である登氏は全国スキー連盟の検定員や理事を永年勤めており、シーズン中には北海道、苗場、蔵王などのスキー場を飛び回っていた。
- ✓ 一番忙しい2月には、一ヶ月で5日ほどしか大山にはいなかったと言う。
- ・ そのため伝承者が一人で多くの従業員を使って旅館を経営していたという。
- ・ まさに大山の細腕繁盛記である。
- ・ 平成に入ってから大山寺を訪れるお客様が少なくなったが、とやま旅館には昔から続く手作りの胡麻豆腐を求めて、遠くは関西方面からも多くのお客様があるという。
- ・ 伝承者は昔を振り返って
 - ✓ 一番楽しかったことは、新婚旅行！
 - ✓ 豪円山をまわって草の中を帰ってきただけ、手一つつないでもらえなかったけれども一番心に残っている。それが昔なりの愛情であったのかも知れないと語った。

<大山豆腐屋物語>

- ・ 江戸時代まで大山は聖域であり、信仰に関わる人しか住むことを許されなかった、実際に古い絵図を見ても寺坊の名前しか出てこない。
- ・ しかし、一つだけ例外となっていたのが豆腐屋であった。全盛期、3000人もの衆徒を抱えていたという大山寺であるが、すべてが修業の身であり、肉は食べることが出来なかった。そういう中で豆腐は貴重なタンパク源として必要であったのであろう。そのため大山で豆腐屋をする権利は大変貴重であった。
- ・ 大山の豆腐屋は、歴史の舞台にもしばしば登場する。

☑ 伝承者 大山町誌：

- ✓ 天明年間の一揆に関わる松尾陽吉「大山騒動雑記」の記述として。
- ✓ 天明6年(1786年)12月10日八つ時(午後2時)一揆の一行は馬喰座鳥居前に集合した。(現在の宮本旅館の辺り)その数およそ五、六百人程で、大山寺領の総人口は宝暦12年(1762年)に3,800人位であったから全戸数の相当部分が参加したものと解される。願書の案文について、山手組のものは年貢減免のことを盛り込むように強く要望した。そこで各村の主だったものが下豆腐屋に集まって願書の作製に立会ったが、その骨子はすでに禅智院や経寿院によって作られており山手組の願は取上げられなかったようである。

☑ 伝承者 遠藤勝壽氏：

- ✓ 江戸時代、大山寺には3件の豆腐屋があったことが知られている。一つは、洞明院から横手道に降りたところにあった西明院豆腐屋。もう一つは、現在のとやま旅館のところにあった上豆腐屋。残る下豆腐屋の場所は分からないと言う。
- ・ 大山寺理観院に伝わる幕末の絵図によると、上の豆腐屋の下手に「豆フヤ」の文字がありここが下の豆腐屋ではなかったかと思われる。

- ・ 初代ウメノジョウさんが大山で豆腐屋を始めたのは明治初年頃のことであった、広島県吉田村の村長の三男坊であった初代は、僧侶になるために大山寺にやってきた。
- ・ 当時、明治維新で混乱していた大山寺では、坊主は少し悪い人（前科者）がなるものだったので、坊主にはならず豆腐屋になったという。
- ☑ 伝承者 兜山富子氏：
 - ✓ 豆腐屋を始めた頃（明治維新頃）大山には豆腐屋はなかったと聞いている。大山の遅い春、芽吹くマユミの実などの若葉が栄養源であった。
 - ✓ 豆腐屋が出来てみんなが喜んだという。
- ・ 明治時代に入っても女人禁制が続き、明治9年になって解けた。その後も女性は月に一週間は下山させられていたと姑ヨシコさんは語っていたという。
- ・ 姑のヨシコさんは、明治20年頃大山で生まれて大山で生活してきたので、いろいろなことを知っていた。姑ヨシコさんは、いつも二つのことを自慢していた。
- ・ 一つは、お父さんである初代ウメノジョウさんの話である。
 - ✓ 「ウメノジョウは、吉田村のツツナガの17代目だよ！」
 - ✓ 「流れもんではないよ！」と自慢していた。
- ・ もう一つは、胡麻豆腐の話である。
 - ✓ 大神山神社の百畳敷きの間でだされた精進料理に、とやま旅館の胡麻豆腐が使われていたといつも自慢していた。
 - ✓ 明治時代の終わりから大正時代の話ではないかと思う。
- ・ 確かにとやま旅館の胡麻豆腐は本物である。最近、高野山などでも缶詰の胡麻で簡単に作る胡麻豆腐が売られている。しかし、ここでは胡麻を搗って手間暇をかけて胡麻豆腐を作る。新聞社などでも取り上げられ、京阪神からのお客様も多いという。

= 名選手を生んだ大山 =

- ・ 大山は、昔から多くのスキー選手を生んでいる。兜山登選手、山崎三姉妹、そしてオリンピックにも出場した大杖姉弟など数え切れないほどの名選手を生んだ。
- ・ その背景としては、スキーが生活の一部になっていたことがあげられる。冬学校に行くときは、スキーを履き、体育の時間はすべてスキー、そして放課後の遊びももちろんスキーと子どもの頃からスキー三昧の生活をしていた。そして、長年受け継いできたスキーの思いと、脈々と築いてきたスキー界での伝統が原動力となった。
- ・ 戦後しばらく大山寺分校では全校スキー大会を参道で行っていたという。

☑ 伝承者 清水正憲氏：

- ✓ 小学校全校が参加する大会であった。学年別か、年代別かよく覚えていないが、「ヨーイドン！」で5~6人が一斉にスタートする。
- ✓ 大神山神社の階段の上からスタートして、参道を通り博労座までのコースであった。大山寺山門のところでコースが急カーブする。そこがジャンプ台となっていてコースの難所であった。宮本旅館の辺はラクダの背のようになっており、下手に転ぶと家の玄関に突っ込むこともあった。

- ・ 今のように旗門を立てるようなことはしない、とにかく早くゴールした人が勝ちである。休憩しながら滑っても、直滑降で滑ってもいいのだが、ノンストップで滑ればかなりのスピードがでたであろう。
- ☑ 伝承者 兜山富子氏：
 - ✓ 小さい子ども達にとっては遊びのような大会であった。
 - ✓ 家の前の参道に出てみんなで応援して、「早や早や！コウちゃん、マアちゃん」などと声を掛けると、子どもが「なに？」と止まってしまう。
 - ✓ 「いや、早すべるだがん！（早く滑りなさい）」と喋って笑ったものだったと語る。

< 兜山登 >

- ・ 伝承者兜山富子氏の夫兜山登さんは、戦前の大山を代表するスキー選手であった。
- ☑ 伝承者 大山町誌：
 - ✓ 米子工業高校在学中の昭和 11 年 2 月に伊吹山で行われた第 15 回全日本スキー選手権大会の滑降でみごと優勝、翌年の第 9 回明治神宮体育大会（現在の国民体育大会）の回転競技で 3 位入賞をはたした。
- ☑ 伝承者 兜山富子氏：
 - ✓ ご主人から聞いた話であるが、昭和 12 年明治神宮大会 3 位になった。米子工業で盛大な壮行会をしてもらったと言っていた。
 - ✓ 全国を転戦し、北海道で合宿をしたあとオリンピックへ行った。ドイツのメルボルンのオリンピックに行ってきた。戦争が激しくなり外国に行くことは出来なくなったので、その後オリンピックには行っていないと語っていたという。
- ・ 昭和 11 年（1936 年）にドイツのガルミッシュで第 4 回の冬季オリンピックが開催されている。当時アルペン競技に日本人が参加したという記録がなく、兜山さんはオリンピックを見に行かれたのだと思う。それと前後してオリンピック候補選手に選ばれたようであるが、戦争が激しくなりオリンピックが開催されなかった。
- ・ 次に日本が参加した冬季オリンピックは、16 年後の昭和 27 年（1952 年）ノルウェーのオスロ大会であった。

< 山崎三姉妹 >

- ・ 戦後の大山を代表するスキー選手と言えば山崎姉妹である。
- ・ 山崎瑛子（きよこ）、君子、八重子の三人の姉妹が長い間全国の第一線で活躍した。
- ☑ 伝承者 大館禅雄氏：
 - ✓ 山崎瑛子さんは、兜山さんより少し年上だった。
 - ✓ 昭和 10 年大山で日活映画「白銀の王座」のロケがあったとき、主演の小杉さんの吹き替えをしたのがこの山崎瑛子さんだった。
 - ✓ 当ても、相当有名な選手であったのであろう。

- ・ 昭和 16 年赤倉で行われた第 11 回明治神宮大会で、姉妹三人で出場した府県対抗戦で 6 位となり、個人戦では八重子さんが滑降で 6 位となっている。
- ・ 戦後は、瑛子さんが第一線で活躍した。全国レベルの大会で常に上位入賞し、昭和 26 年赤倉で行われた第 6 回国体の滑降で優勝、回転で 2 位となった。
- ・ 翌年、現役を引退したが、全日本スキー連盟の役員を務めるなど大山ならびに日本のスキー界の発展に尽力された。

<大杖姉弟>

- ・ この山崎瑛子さんが全勢力を傾けて育てたのが大杖姉弟である。
- ・ 大杖美穂子、正彦の姉弟は、山崎三姉妹の次女君子さんの子どもである。山崎瑛子さんは、彼らの伯母さんにあたる。

☑ 伝承者 大山町誌：

- ✓ 美穂子さんは、小学校 5 年生より瑛子さんの指導をうけはじめた。昭和 34 年中学校 1 年生で全日本スキー選手権大会に初出場し、その後瑛子さんに連れられて全国の舞台上で活躍した。
- ✓ 昭和 36 年中学校 3 年生で全日本選手権の滑降に優勝、回転で 2 位となり、一躍全国のトップ選手となった。一方、正彦さんは、高校に入ってから頭角を現した。

- ・ 昭和 39 年苗場で行われた全日本スキー選手権では、米子西高の美穂子さんが滑降と回転で二冠に輝き、米子工業高校の正彦さんが大回転で優勝し、姉弟でのアベック優勝となった。

- ・ 大山出身者の全日本スキー選手権での優勝記録を見ると次ぎようになっている。

| 大会 | | 優勝種目 | 選手名 | |
|-------|--------|-------|-------|------|
| 昭和12年 | 伊吹山大会 | 少年男子 | 兜山学 | 米子工業 |
| 昭和37年 | ニセコ大会 | 女子滑降 | 大杖美穂子 | 米子西高 |
| 昭和39年 | 苗場大会 | 男子大回転 | 大杖正彦 | 米子工業 |
| | | 女子滑降 | 大杖美穂子 | 米子西高 |
| | | 女子大回転 | | |
| 昭和42年 | 白馬大会 | 女子滑降 | 大杖美穂子 | 日本大学 |
| 昭和43年 | 苗場大会 | 男子滑降 | 大杖正彦 | 慶応大学 |
| | | 女子滑降 | 大杖美穂子 | 日本大学 |
| | | 女子大回転 | | |
| 昭和44年 | 志賀高原大会 | 男子大回転 | 大杖正彦 | 慶応大学 |
| | | 男子回転 | | |
| 昭和46年 | 札幌大会 | 男子大回転 | 大杖正彦 | デサント |

全日本スキー連盟HPより

- ・ その後、二人は世界の舞台へと飛び出した。
- ・ 大杖美穂子
 - ✓ 昭和 39 年米子西高 3 年生で世界選手権シャモニー大会の日本代表に選ばれた。
 - ✓ 昭和 43 年日本大学 4 年生でフランスのグルノーブル五輪に出場し、滑降、大回転に出場し、共に 36 位の成績であった。
- ・ 大杖正彦
 - ✓ 昭和 44 年大学卒業後スイスにスキー留学をはたした。
 - ✓ 昭和 47 年札幌五輪に出場し、滑降 35 位、大回転は失格に終わった。
- ・ この時代が大山におけるスキーの歴史の中で最も輝いていた頃であろう。

<遅咲きの名選手“椎木喜久男”>

- ・ 椎木氏は、大山国体で男子壮年の部大回転で2位になり、みごと地元の期待に応えた。
- ・ 当時37才であった椎木氏は、現在大山町の町議会議員を務める。昭和9年生まれで、大山町種原から佐摩小学校まで4kmをスキーで通っていたという。
- ・ なぜ、そんなに強くなったのか？と問うと。

☑ 伝承者 椎木喜久男氏：

- ✓ 大学を卒業して大山に帰ってきた頃、山崎瑛子さんから大杖姉弟など地元選手の面倒を見てくれと言われた。監督兼コーチとして選手たちと行動をとにした。

- ・ 伝承者椎木氏は、大杖姉弟たちと一回りほど年が離れている。
- ・ 選手たちと一緒に全国各地を飛び周り、一緒に滑っていたためスキーを履く時間が長かった。札幌オリンピックの全日本女子のコーチングスタッフになり、オリンピックの滑降コースを滑る機会に恵まれた。この経験が大きな自信となったと語る。
- ・ また、日本の一流選手やコーチングスタッフと仲良くなった。彼らとは、いろいろな大会で一緒になり、遠征先でも練習するとき便宜を図ってもらえた。そのお陰で、どこに行っても萎縮しなくなり、選手たちが安心して練習できるようになった。
- ・ このコーチとしての経験がその後の選手生活に大きなプラスとなった。とにかく自分の実力を出せば勝てるという自信ができた。

☑ 伝承者 大館禅雄氏：

- ✓ 椎木さんは努力型である。練習量もさることながら、いろいろなところから情報を集めてきて良く研究していた。優秀な選手の滑りを見て勉強したと語る。

☑ 伝承者 椎木喜久男氏：

- ・ スキー上達のポイントを問うと。
 - ✓ みんな勝ちたいと思っているが、自分の実力が出せない。ポイントは、スキーに対する情熱を持ち、相手を知り、勉強すること。とにかく経験を積むことから始まる。
 - ✓ そして失敗を重ね、成功したときのデータを自分のものにする。
- ・ 今後のスキー選手育成について問うと
 - ✓ 大杖姉弟などが県外にでてしまい、県内に目標となる選手が一度にいなくなってしまう。この辺が今、選手が育たない一つの理由ではないか。
 - ✓ 科学的な練習などは必要ない。まず、繰り返し、繰り返し、練習すること。
 - ✓ 今の選手は練習の絶対量が足りないと思うと語る。

☑ 伝承者 大館禅雄氏：

- ✓ 選手の育成について大山だけは限界がある。特に近年の技術は変わってきており、いち早く変化に対応する環境が必要である。全日本クラスの良い選手と競い合い、よいコーチから指導を受ける。
- ✓ 幸い全日本には、大杖兄妹をはじめとする大山の出身者がたくさんいる。今ならまだ間に合う、この人脈をうまく利用することが必要である。

5. 山頂小屋 ものがたり

<最新鋭の頂上小屋>

- ・ 大山夏山登山道の9合目付近の木道から三つの風車が見える。これが全国に先駆けて作られたエコトイレの風力発電装置である。
 - ・ 中高年を中心に登山ブームが広がる中、全国各地の山でトイレの処理の問題が大きく取り上げられるようになり、大山山頂でも同じ問題を抱えていた。大山では、雨水を利用して特殊な方法で処理し、再び水洗の水に使えるように浄化するトイレを全国に先駆けて採用した。その処理にかかる電力も、風力発電と太陽光発電でまかなうシステムを採用している。つまり、自然に優しい自給自足のトイレということとなる。
- ☑ 伝承者 広瀬浩一氏：鳥取県文化観光局景観自然課長
- ✓ 大山では全国に先駆けてエコトイレを採用している。4本の風車を利用した風力発電と太陽光発電により頂上小屋の電気をまかなっている。
 - ✓ 東北地方で実用化されている風力発電のシステムを参考にした。しかし、予想以上に厳しい気象条件により風車が樹氷のようになり、冬期は使えなかった。

<山頂小屋のおばあさん>

- ・ 大山山頂には、エコトイレの付いた避難小屋がある。いつからこの山頂小屋があるのか定かではないが、昭和10年前後にはあった。
- ☑ 伝承者 遠藤勝壽氏：
- ✓ 昭和10年頃小学校の高学年の時に学校から大山登山に行った。その時、大山の頂上には、屋根が地面に付きそうな小屋があり、細い屋根には土の付いた草がかけてあった。その小屋では、山崎さんというおばあさんが豚汁を売っておられた。
 - ✓ そのおばあさんは「よう来たな」と言って豚汁をごちそうしてくれた。とにかく寒い日であったので、子ども心に大変嬉しかったことを覚えている。
- ・ このころからすでに頂上の避難小屋はあったようである。ちなみに、この時のおばあさんは、大山のスキーの創生期を支えた山崎三姉妹のお母さんであった。

<大山遭難の歴史>

- ・ 明治39年大阪毎日新聞社の探検隊が大山の登頂し、3泊の野営をしたという記録がある。その当時は、大山山頂は「探検隊」が行くところであった。大山登山が一般的になったのは、大正時代に入ってからであったのだろう。
 - ・ 大山は中国山地から少し離れた独立峰であり、日本海から吹き付ける季節風をまともに受ける。北アルプスなどに比べて標高は低いものの、冬期の気象条件は厳しく遭難事故も後を絶たない。大山夏山登山道の7合目と8合目の間に木製の遭難碑がひっそりと建っている。これが大山ではじめて遭難した人たちを供養するための碑である。
- ☑ 伝承者 遠藤勝壽氏：
- ✓ 昭和12年12月5日安来の草鳴社という登山愛好家のパーティーが下山途中にこの碑のある辺りから登山道はずれ遭難した。4人のパーティーの内、1人は生還したものの3人が亡くなった。この碑のことを「草鳴社ケルン」とよんでいる。

- ・ 最近でも日本を代表する登山家である高見和成さんが二度（平成 5 年、平成 8 年）の遭難に遭い命を落とした事故が思い出される。
- ・ 大山で遭難救助隊に参加したことのある遠藤氏に救助の様子を聞いた。
- ☑ 伝承者 遠藤勝壽氏：
 - ✓ 昭和 34 年、登山仲間が帰ってこないとの一報を聞き、大山に駆けつけた。
 - ✓ 朝早く、宝珠尾根・ユートピアから登り捜索に向かった。天狗尾根から下の方に滑落している 2 人を見つけたときは、まだ早朝であった。
 - ✓ 尾根から遭難者のところに降り、シュラフで遺体を包み、ザイルで尾根まで持ち上げたときには、すでに夕方となっていた。
 - ✓ 灌木を切り遺体をたくさんのザイルで縛り、それをザイルで後方と前方に数本張り尾根をユートピア・宝珠尾根に向かったときにはすでに日が落ちていた。
 - ✓ ヘッドランプの弱い光を頼りに宝珠沢に降りた時には、灌木のそりもこわれて遺体の一部がむき出しになっていたことを覚えている。
- ・ 博労座まで帰ってくるとすでに深夜の 3 時頃であった。遺体を警察に渡した伝承者は、勤務していた学校の宿直室の布団に潜り込み生徒がきたのも、昼がきたのも、分からず眠り続け気がついたときは夕方の 4 時頃であった。
- ・ 北アルプスなど多くの山を登っている伝承者であるが、登山人生の中で最もつらく、悲しい思い出であると語る。

<大山自然保護の歴史>

- ・ 大山が国立公園に指定されたのは昭和 11 年 2 月である。日本ではじめて指定された国立公園は、昭和 9 年に制定された瀬戸内海国立公園である。
- ☑ 伝承者 澤自然保護管：環境省山陰事務所
 - ✓ 国立公園制度ができた頃、その制度の目的は日本を代表する景勝地を保護し、外国人観光客を誘致して外貨を獲得しようとするものであった。
 - ✓ 明治時代、船で日本を訪れる外国人が通り、静かな海と風光明媚な景色に驚いたという瀬戸内海国立公園が最初に指定された。
- ・ その 2 年後に大山も国立公園に指定されており、日本でも最も古い国立公園の一つといえる。そのような国立公園制度も次第に自然保護に力を入れるようになり、昭和 24 年に特別保護地区の制度が制定された。特別保護地区とは、その地区内にある動植物を採取することはもちろん、落ちている葉っぱすら持ち帰ってはいけない所であり、鳥取県内では大山の山頂と鳥取砂丘の真ん中が指定されているという。
- ・ 昭和 40～50 年代にかけての観光ブームにより 200～250 万人もの観光客が大山を訪れるようになった。多くの登山客が山頂に上がり、無秩序に散策するため大山山頂の植物が全くなり、土がむき出しの状態となった。
- ・ また、観光客が残していくゴミ問題も深刻化してきた。

- ・ そんな状況を受けて昭和 52 年官民一体の「大山をゴミから守る県民運動連絡協議会」結成され、春と秋の年二回、大山全域の一斉清掃を行うことになった。昭和 53 年の一斉清掃では、13 トンのゴミが集まり最高を記録している。
- ・ その後、ゴミの量は減少を続け、現在ではピークの 10 分の 1 にまでなっている。
- ☑ 伝承者 広瀬浩一氏：
 - ✓ 大山での自然保護運動は、全国的に見ても先駆的な取組である。
 - ✓ 特に、民間からおきてきた活動であることが意味深い。いわば、大山はゴミ持ち帰り運動の発祥の地ともいえる。
- ・ 昭和 59 年 10 月 27 日有志が大山山頂に集まり裸地化した状況を見ながら協議、下山後実状を訴えた。昭和 60 年その報告を元に「大山の頂上を保護する会」が結成された。
- ・ 頂上を復元すると言っても、ただ植物を生やせばいいというものではない。特に大山山頂は国立公園の特別保護地区に指定されており、雑草一本勝手に抜けない場所である。元の山頂を取り戻すために環境省とも連携しながらいろいろな試みが行われた。
- ☑ 伝承者 遠藤勝壽氏：
 - ✓ 一木一石運動でいろいろな善意が各地から届くようになった。
 - ✓ しかし、もともと大山になかった木や石で大山山頂を復元する訳にはいかず、理由を話し持って帰ってもらった物資もあった。
- ・ 頂上での作業も厳しい気象条件により難航を極めたようである。最初は、麓で 2~3 年ぐらい育てたキャラボクやヤマヤナギなどを山頂に持ってあがり直接植えた。春になってあがってみると植えたはずの木が霜で 5 cm も盛り上がっており根付かなかった。
- ・ その後、わらをかぶせたり、椰子マット（椰子の繊維で作ったマット）、「こも」などを敷いて木を植えたが保水力がなく根付かなかった。少し厚みのある「むしろ」を使ってやっと成功したようである。
- ☑ 伝承者 遠藤勝壽氏：
 - ✓ ある年、自衛隊などに協力をしてもらい「むしろ」を使い植え込み作業を行った。
 - ✓ 作業も終わり頂上の避難小屋に泊まっていた。その夜台風が来て朝起きてみると「むしろ」がとばされていて、その場にいたメンバーで谷の方まで落ちているむしろを拾った覚えがある。
- ・ うまく押さえていなかったため飛んだものであるが、その後、しっかりとした間伐材を大きな杭で打ち付けてようやく飛ばないようになった。キャラボクはなかなか付かなかったため、最終的にはヤマヤナギや頂上に生える草などを植えるようになっていた。頂上を保護する会の活動や多くのボランティアの善意により、平成 5~6 年頃から緑あふれる頂上へと生まれ変わったのである。
- ・ 現在では、山頂付近の木道や登山道も整備され、毎年多くの登山客で賑わっている。
- ・ 大山の自然保護活動で特筆すべきことは、いずれの活動も民間の有志から起きていることである。やはり太古の昔から大山を愛する気持ちを抱き、その心が自然保護活の盛り上がりにつながったのではないだろうか。

6. 大山ジャンプ台

<三代のジャンプ台>

- ・ 豪円地蔵が祀られている豪円山の南側斜面にコンクリートでできた立派なジャンプ台がある。西日本には、大山にしかないジャンプ台である。平成5年に行われた二回目の大山国体で、あのオリンピック金メダリストの船木和喜が飛んだジャンプ台である。
- ・ このジャンプ台は、大山における三代目のジャンプ台となる。

<兜山学が飛んだジャンプ台>

- ・ 現在のジャンプ台の南側、豪円地蔵へと続く道の少し下に、土が盛り上がったところがある。これが初代のジャンプ台である。
- ・ 大山の生んだ名スキー選手の一人である兜山学氏夫人の富子氏の話によると。

☑ 伝承者 兜山富子氏：

- ✓ ご主人はジャンプが得意であったといていた。
- ✓ 古い豪円山ジャンプ台で39m飛んだのだと自慢げに話していた。

- ・ 39mといえばほとんど平らなところに着地したことになる。当時、ジャンプのスキーなども揃っていなかった時代にそれだけの距離を飛ぶには、相当の技術と度胸があったのであろう。今の大山にも、その痕跡がしっかりと残っている。

<笠谷幸生が飛んだジャンプ台>

- ・ 昭和47年大山ではじめて行われた国体のために作られたのが二代目のジャンプ台である。現在のジャンプ台の少し南側であったらうか、鉄筋で弧を描くようにランディングバーン(着地点)が作られていた。今のジャンプ台より一回り大きかったように記憶している。このジャンプ台は、札幌オリンピック金メダリストの笠谷幸生さんが飛んだことでも知られている。
- ・ 札幌オリンピックは、昭和47年2月3日から行われ、ジャンプ競技では、1位笠谷、2位金野、3位青地と日本人選手が表彰台を独占して日本中がわき上がった。
- ・ その直後、昭和47年2月20日から大山国体が開催された

☑ 伝承者 大館禅雄氏：

- ✓ ちょうど札幌オリンピックの直後の開催であった。
- ✓ オリンピックの金メダリストが来るとあってみんな注目をしていた。

☑ 伝承者 大山町誌：

- ✓ 最終日、札幌オリンピック金メダリストのジャンプを見ようと、四千人の観衆が集まった。159番の笠谷は期待通り見事なジャンプで優勝。観衆の期待に応えた。

- ・ 当時の状況が目につかぶようである。その後、使われることなく、長い間放置されていたことを覚えている。ランディングバーンの板がはぐれ痛々しい感じであった。

< 船木和喜が飛んだジャンプ台 >

- ・ 大山は冬季国体の開催できる日本の南限といわれている。広島県北部にも多くのスキー場はあるがジャンプ台がない。平成 5 年の国体に合わせて作られたこのジャンプ台は、総工費 673 百万円といわれている。当時高校生であった長野オリンピック金メダリストの船木和喜選手もこのジャンプ台を飛んだという。
 - ・ このジャンプ台も国体以降、一度も使われていない。
- ☑ 伝承者 木田達二氏：
- ✓ せっかく作ったジャンプ台なので有効に使う方法を考えたい。
 - ✓ ジャンプ台の隣に付いていたリフトがなくなったのは残念だ。ジャンプ選手も今やスキーを担いであがる時代ではない。
- ・ ここまでお金をかけて作ったジャンプ台を国体のためにだけ使ったのではもったいない。今、各地でサマージャンプ大会なども開催されている。グリーンシーズンの活性化が課題となっている大山にとって、一つの起爆剤になるかもしれない。

= 大山の観光開発 =

< 大山王国 >

- ・ 現在、大山を含めた鳥取県西部地区の活性化を図るための活動が様々な形で展開されている。その中でも草分け的な存在が大山王国ではないだろうか。
 - ・ 大山王国の設立から携わり、現在運営の主体となって活躍している石村氏によると。
 - 伝承者 石村隆男氏：
 - ✓ 大山山麓の市町村が集まって地域の観光資源開発を検討していた。
 - ✓ バブルがはじけてハード面でも事業ではなく、ソフト面での事業が見直されている頃であった。以前から暖めていた構想が取り上げられ、その後の大山王国の活動へとつながっていった。
 - ・ 石村氏は、大手旅行会社で海外旅行の企画担当を長く勤めたという。仕事柄多くの国へ旅行することがあり、30 カ国以上の国に行った経験を持っている。海外旅行にでると日本の良さ、そして米子の良さがよく分かるという。
 - ・ 32 歳の時に米子市の研修制度を利用してアメリカのコネル大学で観光ビジネスを学んだ。成果をまとめ観光活性化についての企画書を作り、機会を待っていたという。
 - ・ 彼の企画は、生きた情報をお客様に届けること、そして一度来てくれた人がリピーターとして、もう一度来てくれるような仕組みを作ることが目的である。
 - ・ HP やガイドブックを利用して、常に新しい情報を提供し、また来たくなるような期待感を与えることを目指している。
- ☑ 伝承者 石村隆男氏：
- ✓ 市町村という単位ではなく、もう少し広い視点から観光を考える必要がある。
 - ✓ 地域で同じ方向を向いて観光振興をすることが重要である。残念ながら現在は、松江・玉造は東京などの関東圏、大山・皆生温泉は関西圏、日野は米子などからのお客様を呼ぶことを考えており、ターゲットがバラバラである。

- ・ 島根県では、元宮岡松江市長や元岩国出雲市長など強いリーダーシップを持った指導者を中心として戦略のある観光開発を行っている。これからの観光振興は、大きなベクトルに向けてみんなが力を合わせて取り組むことが重要である。
 - ・ 石村氏は、現在の地域観光の課題として次のように語る。
- ☑ 伝承者 石村隆男氏：
- ✓ 観光を総合的に運営する母体がない。プログラム作りから運営に至るまで一貫して取り組む。誰かがやらなければ取り残されてしまう。
- ・ これからの夢として
 - ✓ 完全無欠のインフォメーションセンターを米子に作る。米子ためだけではなく、山陰全体の情報を発信する。いわば、観光情報提供のハブ機能を果たしていきたい。
 - ・ 米子は、古くから交通が発達しており、文字通り山陰の玄関口である。
 - ・ よく通過地点といわれるが、通過地点ということはとりあえず人が通っているのである。
 - ・ そのお客様をいかに取り込んでいくのが今後の課題である。
 - ・ 交通の要所というだけでなく、情報の要所にするにより、山陰に来るときは一度米子によって行くというような状況ができれば、この地域の観光振興にとって大きな一歩となる。

<スポーツのメッカ大山>

- ・ 夏になると大山寺周辺には、関西方面から多くの学生がスポーツの合宿に訪れている。都会から離れ過ごしやすい環境の中で、心と体を鍛えているのであろう。
- ・ 長野県に菅平高原という所がある。冬はスキー場として多くのスキー客で賑わうが、夏場になるとその様相を一変させスポーツ合宿のメッカとなる。大学ラグビーの合宿地として有名であるが、そのほかにもサッカー、テニスなど様々なスポーツの合宿が行われている。環境的には、大山も菅平に引けを取らないだけのロケーションにある。
- ・ しかし、大山のイメージはまだまだスキー場の方が強い。このイメージを変えていくことも重要な観光振興ではないだろうか。
- ・ また、利用者の立場に立って利用しやすい状況を作ることも重要である。大山周辺には、多くのスポーツ施設がある。しかし、行政の単位が違うため利用するためには各々違った手続きを必要とする。利用する側としたら、このような手続きや情報を一元的に扱える場所があれば非常に便利である。
- ・ このような、利用する側の視点に立った施策も必要であろう。

<登る観光から降りる観光へ>

- ・ 大山寺の観光の目玉は、千数百年続くという信仰の証である寺社である。大山寺のバス停から大山寺本堂までは上り坂の参道が約 500m 続く。
- ・ そして大神山神社奥の院には、大山寺からまた約 500m の日本一長いといわれる石畳の参道を登って行かなくてはならない。

- ・ 最後に大山寺の将来像を大神山神社の宮司である会見氏に聞いてみた。
- ☑ 伝承者 相見佳之氏：
 - ✓ 観光客は減っているが、信仰の人（大山の信仰）は減っていない。
 - ✓ 信仰のためにお参りする人をもっと大切に！
 - ✓ 観光客は一度来ると次は何年も先、信仰の人は毎月でも参る方がいる。

 - ✓ 信仰をする人たちが少しでも増えていけばもっと違う。
 - ✓ 信仰を忘れて、観光にだけ目を向けていては大山の将来も暗い。

- ・ 大山寺の成り立ちを考えると納得のいく話である。もともと大山は、航海の道しるべとして、清らかな水の恵みの源として、そして天変地異から守ってくれる“母なる山”として大切にされていた。その山が信仰の対象となり、地元をはじめ中国地方各地から信仰を集めてきたのである。
- ・ 大山に人が集まり観光地となったのもとはといえば、その信仰心があったからこそである。そのような大山観光の成り立ちをもう一度理解した上で大山観光のあり方をもう一度見直していく必要があるような気がする。